

枯尾華 下

~ 5

1247

2

60

65

70

75

80





十月廿五日共桃隣出武江而暨  
義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱

紙負巢



いつのそよ風のしるもよも高のそよ  
あつてみし秋さう春よわたり村よさ  
笠子眠り小菘の病つるのほ世をふま  
ゆねや松葉もあまのしほのしほ  
るをそよ風のしるもよも高のそよ  
はる樂あつても生おのゝあまのしほ

結尾下







十月廿二日夜無行

嵐雪

十月廿二日夜無行とほつらあつたむ

ちりねのちよ一節の長少む

溢のゆろ二るハ五里しくまき 百里

高橋をえねる沖の船以神叔

のぬ乃ハつち白お鳥を袖 東潮

ま騷ささひて豆あり一唱 浮生

蜀黍の室まきまきし相中 卜宅

お鳥あつたまよて土をある 舟竹

新川よすい名あつた右橋のく 桐雨

ありのまんと照くともよ 月下

存在るあをあゆむ田植をも 風洗

揺午はくもをぬる干飯 撤下

幼虫の茶の湯延てはあかり 咸宇

赤い菊さう黄ちの菊を嗅 牧人

上へ氣一て吹きあもる 秋の風 菊歌

ちりとあつたて床をさる月 狼鉤

ちりもも菊あつてはあかり 東嶽



山吹もくく初をこよれ年 毒  
 春風も吹のやいな寒きくして 海  
 氣おのころよ時ハ所見る 百里  
 只市より四十の内ノ樂坊主 氷花  
 水響いづくしをそゆ存 嵐雪  
 くらひきて務まの軒々のしりり 神叔  
 佐解のふの乃ち就静まる 左殿  
 高窓のちるま切打く送るく 百里  
 城の近くは旅こものある 神叔

傘のわやあまりく傘いなる 氷雪  
 あまのあまのふ母の氣を 氷花  
 あくまの吹煮くあのみ 左殿  
 先きのちよ師走あつく 百里  
 ちあをちるくくくユ心ちよあを 氷叔  
 中山道ハかかるとあくく 嵐雪  
 一あを米の價のくく 百里  
 さあ代もあくと活る老 氷花  
 せよんハあつあつあつあつ 氷雪



せし常の瘠のりらむと成緑子

満座追善各焼香

たのふく人の瘠ちも四季の跡は 百里  
見おさちの愁ふいつはちるは 氷花

悔前非

もなつちる悲しむ志きぬ 神叔  
苦しむくのみもあき塚の雪 淳生  
風のふりし 何ふか墓乃月 舟竹

あつちるれ夢の夢の根のたし 咸亨  
侍也ニたとなむむ月時る 舟竹  
うねきやうをさるる潮改 舟竹  
あつちるのちちをふさるる 素子

芭蕉のあつちるるるるる  
あつちるるるるるるるるる  
あつちるるるるるるるるる  
あつちるるるるるるるるる  
あつちるるるるるるるるる



十月廿二日毎

好くも多く訪ふとつと道旅  
さあさうさうさうさうさうさう

付やあいのきあいのあとおとち桃隣

流くゆりよあれ目の乳子珊

一面千起のほ小松ゆやと杉風

よごれーるま川あま 甚水

名由いふ飯あくるくーる 善良

どこやう腔ふ所の帷子 序志

皂莢又梅をあつる 鴟のち太火

ゆえに中入ル古桶乃底 亀水

心のよ今の住家を憎とそ 孤筆

とまらうらら景の塩漬 子祐

け寒さあつれう雪のふる曇 利牛

あ綿の重とふよのそふる 白足

脊を伝ふあつるそくもあ 蚊足

お通とらねと 畑のうら 夢草

やあくく平泉さうもさる此月 時坡



大幅せりふ布の爲綿 太洛  
 ま白な陰ハ流る岸の色 八葉  
 俵のくさる魚子 燕あつた 桃川  
 とろくさるさしあせしもの 元 初合  
 昼みはくろして昔のこいを根 磯く  
 酒乃を干なりくさる 笠 西川 文梁  
 仰見おといて 砥 銀五毛に 湖松  
 晴るるくさるうかよなをよに 桐溪  
 家のあつたあさこ 小利子住ム 嵐夜

丁寧子ヌ 桃灯く 送らるる 石菊  
 凡々あり雪の柳地あつく ちり  
 梅のこゝ 苦 齋とくろりかいたり 嵐竹  
 白みよ 梓のせりしあさる 此筋  
 おろもつしあ 経 奢る 月の若 素龍  
 以脚あつり 中 文る 水 凡 子川  
 よいこと 紫 ぼりり 多 小 菊のあ 楚舟  
 流を中流く 雨あつる 角蕉  
 折るなるら さら さら 燈を 樽 杏村



紫くも白紫のわのつちる年 川鷗  
見開ケとをのつらな花微笑 濁子  
昏をむすんし 乾うけをら 滄波

舟仙浦を普普之吟

うらむつお 保もなや 砂を舟 杉風  
枯きくや 舟も力もなよ 舟わし 八葉  
先程もや 舟舟よ 舟の舟は 舟 子珊

見らむよ 舟中さうけん 舟の舟 太夫  
舟くくや 舟お 舟の舟 舟  
菊くけく 白を惜む 居士衣 舟 子祐  
山菜もむ 舟の舟は 舟もやん 舟 舟  
うらむ 舟を 舟くく 舟もやん 舟 舟志  
舟の舟も 舟くく 舟くく 舟の舟 舟 舟  
舟内めくく 舟くく 舟くく 舟の舟 舟 舟  
舟くく 舟くく 舟の舟 舟くく 舟 舟



悲しむる色みづのさるあなは 桃川  
 され花並よこあらんを牡丹 花と  
 なるけしや中庭の下の下 馬好  
 幼きを思ふよりの子向が 用陽  
 りるみづの粟津うりりの植柳 杏村  
 くの難もくやいふれあ仙む 石人  
 むぢあもも昔の植木の燃きより 芳良  
 あく色もる繩床さしみる霧 澹波  
 神あもる田をきくは 執白 角蕉

義仲さく送る悼

水さるん足もあつとて厚川 李吟  
 告るくあし死款おしあみの山 露沾  
 花あもるさつと小春ああはる 山夕  
 錫杖さしあしあうりらあなあ 直方  
 浮くくも目のあちあなるあのも 堅風  
 あもあちう 檜ハあし 塚のあ 濁子  
 あもあちうあもあちあ 壺蛙  
 あもあちう 白い卒都等と夕光 山蓬

法眼



花はしらのとや十余のの葉 涼葉

小庭やちやとを運ぶる葉の凍 大舟

りくの庭や十段のたひりき 九板

踏をみよや社のまの初歩 此筋

立よよと心うはる塚のまね 千川

力州引切るきく下あきくは 淵泉

まぐさるるのん笠のまを所 支老

枯草のまや採る葉の糸 卜子

まき菊乃咲ほ運ぶる名あふ 捲糸

衣... こと通ハ戸ロよりしてある 其丹

こり形元菴の燈蓋五指の依 依勅

何のつのはりのゆや 枯草 蓬山

五十二のゆち一箇のまろけか ちり

既既流をまふも社のくまら 鹿谷

その塚をさすまを枯草のまのま 穀子

心ゆきを頼る凍つく泪の家 馬寛

風の声んや捨糸もたまひんぐり 素新



十月廿六日追善

湖春

亦多々やあつたの木な搔

一羽はくしよまゝの朝鳥 まぶた

破繩 ワカ 宿るゆき辰あふく こ 露沾

あつたの音れりける ハタ 山 萍水

新中よみあつたけし た 庭の壘 枕隣

あつたのちを川とく た 山 岳水

ゆきハ物さつた た 孝人つら た 舟破

あつた雨のまら四五所 た 孤壘

その形はねと巻く百合の巻 た 利牛

竈の火く た 庭 た 松風

まゝの力 た 死所 た 素堂

帆 た 舟 た 筆

山 た 竹 た 利合

盆 た 鉢 た 妙妓

膳所 た 窓 た 竺水

二 た 柳 た 柳橋

む た 押 た 杉風



酒をこぼすかやうり  
利牛

けつをえとお下至むの真を委  
孤を

まくつまはる雨の好相  
盛可

かあのみたつけハ猿も若相  
桃隣

子たの勢のこゝに持園  
利合

是この叔借り返す力相  
形破

高氣あつた大石のち  
杉風

物事のつらつら存れ  
刑牛

那布こめり酒より  
孤を

のし録の上のめさる配り録  
盛水

とねらおれを雁やうめなる  
枕隣

山くを信はりの者み物くも  
杉風

本のみりよ兼美相  
形破

言の本の並らり下り相  
孤を

小あけをうけてゆるら  
利牛

二ころ伊勢上り乃物  
形破

高句のれ中あを  
盛可

袖を今師の好かむもの枝  
枕隣



そら優美あるよりの夕昏 利合

十月廿二日

音子亭ありて真如

今やとも雪のよもぎの光る

仙化

かつさあよ藤し並み鴨 是吉

あつ月黒よ衣敷ハ新地て 介我

掛ひのこさる 階下 くら方 柴栗

了のよの柏イフキ橙ニヤは 湖月

昼の前の穴をけりあう 津粒

その向も世々の隙の目をけり 揚水

カむよあいく 征 志あるる 扱凡

けしを道く召く 柳の内 由之

雀の枝をさ 柳乃あまふ 全峯

日る原てま本の屑ハ泥あ行 祐徳

むくもろく 柳平のた 季下

合羽あふよるく 鈴く白星 津粒



小侍を千あつていさみつて蘇 扱み  
 扇うほ穢きしわん月の香 柴車  
 側のところ乃白ひをよき 仙化  
 ちのきりほきと舟あそび 扱み  
 ちいさな松のうしむ例の入 李下  
 ち貝の阜もあつてものき 四月  
 日光様子似あよ芳い飯 柴車  
 かこひするを忘れ 蘇の程 介我  
 ち集ののかくい名やう判す 非扱

ちあたとえすえい茶入袋して 扱み  
 あよ躑キヒスとぬるその緒 四月  
 墓のごとく香をきくして惜る 介我  
 ちを土戸あそび口元 治徳  
 ちこのの所へをけり 仙化  
 生キくらあをきと悪の入物 扱み  
 年の月あ烏帽子の乳の直ラ 李下  
 二シのあ扱き並よ虫象 全峯  
 色もあく新の葉の小葉喰ム 非扱

禁  
 三



つみえ 猶子まろりゆ 米由之  
 肩痺のあし 宿のまじり 入る 仙化  
 何一りあつて 牛除る 介我  
 常のえむ 連気 拍むの 花のま 佑徳  
 垣や 桃をく の 殺す 湖月

深草のあま 宗我 宗我士を 讃して  
 いそよや 友風 月家 旅泊  
 芭蕉の おま さま 似たり

旅の 旅つもの 宗我の 宿の 戸素堂

あま 宗我く 人 友風 宗我の 展 佑徳  
 燈 天の 宗我く 宗我を 新 佑徳 松風  
 風子 宗我の 佐 宗我 猿乃 面 介我  
 月 宗我の 近 宗我の 土 宗我の 縁 宗我  
 梅 宗我の 宗我を 破 乃 面 宗我 湖月  
 風 宗我の 宗我の 宗我の 宗我の 宗我 柴栗  
 秋 宗我の 宗我の 宗我の 宗我の 宗我 暮子  
 か 宗我の 宗我の 宗我の 宗我の 宗我 拙  
 帰 宗我の 宗我の 宗我の 宗我の 宗我 岡指



力州とらるる一り 乾花 山峰  
 果をまきまきみみせり 芭蕉の 寒玉  
 十徳の神ありこの世のま 秋色  
 まらうよ 菴女 ありつて 和永  
 白の飛やけ十月の世のこやと 芝蔴  
 さんくいや 難波く向て 一雀  
 詠のましてまの蜜柑をま向た 是吉  
 ありまのま向まむちがく 林也  
 雪のまもともひ忍のや名付 秋 李下

窓乃言はつひ果ある拂子介 亀翁  
 青石乃陰もあふれや木津の搔 横儿  
 孫乃歸子持あまのりの痛乃杖 景桃  
 又もま思孫よまきりりて相柱 萍水  
 ちりの船や膝をかえきく冬を路 野坂  
 赤乃孫を掛く些しよ時雨り 孤屋  
 油火の溜く悔むやまを路 利牛  
 下るま河く枝の枝さる柳介 疎雨



流れるをせむるの如く合 然水  
深川よりとりつけつやなるる 石葉  
月のさびまきこちうしやも世果 利合  
義教寺の美しむ師の像ありて  
明外を修むるにその隠造の志子  
いづくにひかぬのあすけりありぬ  
りしより遠星を海濱にかりておの  
よむぬしよあはれをまゝしるる也

月さるる假の菴やと祈 批教

十一月十二日初月忌

丸山量阿弥亭 興行

泣かす寒菊ひかり耐<sup>コタ</sup>ふり 嵐雪  
向上躰を雪のゆわはは 枕隣  
流<sup>レ</sup>空のひろるを遅く扇<sup>カサ</sup>をそく 岩翁  
車<sup>カサ</sup>よりそくそ教の畳<sup>カサ</sup>ナリ 晋子  
笠賣ありよ告<sup>カサ</sup>ふあはれ 亀翁  
うし傘と志<sup>カサ</sup>ぬき大<sup>カサ</sup>ふ字 横儿

結下



名月も持来の一種おもひ付テ 尺艸  
 おくあほほし廣ふ相の糸 松翁  
 白粉の鏡よりくる秋のし葉 去来  
 火焔のくさりのりくち中 正秀  
 名谷越の山よあつらふあるま 曲琴  
 榎の木のつられ海をたはふ心 筆  
 吹くさく屏風を膝に押さ 徹士  
 鼓くさく色し大かゝりあると 心圭  
 のまをうらみ盆みあると 暮四

名月も持来の一種おもひ付テ 尺艸  
 おくあほほし廣ふ相の糸 松翁  
 白粉の鏡よりくる秋のし葉 去来  
 火焔のくさりのりくち中 正秀  
 名谷越の山よあつらふあるま 曲琴  
 榎の木のつられ海をたはふ心 筆  
 吹くさく屏風を膝に押さ 徹士  
 鼓くさく色し大かゝりあると 心圭  
 のまをうらみ盆みあると 暮四  
 名月も持来の一種おもひ付テ 尺艸  
 おくあほほし廣ふ相の糸 松翁  
 白粉の鏡よりくる秋のし葉 去来  
 火焔のくさりのりくち中 正秀  
 名谷越の山よあつらふあるま 曲琴  
 榎の木のつられ海をたはふ心 筆  
 吹くさく屏風を膝に押さ 徹士  
 鼓くさく色し大かゝりあると 心圭  
 のまをうらみ盆みあると 暮四

書

六



雨の目ハちまもあつていづらとて 批發  
けこいちんぞとるあるほ目嵐雪  
のりおいき羽の尻乃下み垂 横儿  
あつちちきとりの葉綺 荷今  
うけこの金をうけしむもむ極成 去来  
上たの算を訊く適合 尺牘  
ゆの真もいづら扇のきくも言 吹雪  
おもすみかきる飛浮曲乃目 岩翁  
うこころ受戒の見乃白素繪 徹士

能くしめよと使ひてたのふ 晋子  
あつ腰の起り物らあつ月の 集加  
櫛子ゆきとねりゆの蔓 桃枝  
新や着坊袂のまゝあつ女 巨海  
衣袂の小袖あるとるする 風心  
生りつる齒をゆきとあつひ 晋子  
このまゝ女袂ハあつも言りも 尺中  
長旅よ持あつとるほるる 歎言  
一日 孫をうり上る 教心圭



ちしららあまをかしよんあし 枕隣  
 あの藤多やあまの人 岩翁  
 よろけもあまの柱杖 横儿  
 こゝやとてさくみぞ鶏足 巨海  
 牛糸をきりしこ乃 女子あま 尺中  
 男あけて碑のさむる月乳 進を  
 おんまて荷ひあまよちしむ 徹士  
 年一越すまは坂の掃拂 花兮  
 肥肉ふまのいささく志あつふぐり 集加

梵天寒くまの川中を 言四  
 灯も国を流く光るん 花兮  
 不思議な娘をちりて 吉本  
 白隙のさそつる志あし 思ひ境 岩翁  
 みろとあまともうよ短尺 吾子  
 こつと四と枝燈はくせの猿杖を 妙童  
 境あうくすはあまあまこくう 瀬士  
 せあうくすはあまこくう 曹凡あ  
 そののは花を猫んあま 集加

集加



湖を築みみきる 山の景 尺巾  
イケス  
 夢とらしめ定まらざる世の額 鼠音  
 昔の月脚半もとらぬ膳待 桃蔭  
コウ  
 かのそよの櫻くらげふ梅もよ 苔四  
 こころのちりもく 鹿もく 飼猿 岩翁  
 おのころのふ 兼蠟燭のきりこし 撒士  
 おんりののちりふふ 十念 集加  
 産るや色もこころの男の子 晋子

ちりちりしるる 鈴夕乃 酒風必  
 節季ののちりちり ちりちり 相子あや 横儿  
 憐と 叩えよ 施茶合 尺巾  
 形どろろ ちりちり 桃蔭のく心 桃蔭  
メト半  
著 言四  
 鬼のよよのちりちり ちりちり 月つね 心主  
 うい着るのちりちり ちりちり 鼠雪  
 ちりちりもあやあやく 老ぶふ 若兮  
 うい 門付る 垣のしり 去来



ナ  
米<sup>ナ</sup>のほもろあつてぬる 炊舟 集加  
地蔵を建てるの浮橋 晉子  
筆の制れらぬおのちて 岩翁  
よろそつ運ずお痛ら木松 徹士  
天井を上げしあつてをた敷鞠 尺中  
うれ刈込や里のま物 荷兮  
社のちのぼくくちハッリ 横儿  
まはらさこいあつるの脈掛 心圭  
狭形の竹つるあつたの月 嵐雪

さらもの着ると母のセマツく 舟童  
井多うら痛ハ付属の 沈梅あつて 岩翁  
はあつて月を落すの糸 風翁  
あつて赤飯くるとる大井 辰 集加  
おしをあつる百姓の弓 晋子  
目のこま心はらある 袴樓ち 徹士  
は脚の登り登りして 尺中  
何れもあつて風をさうあつて 心圭  
新大橋のふまよくぬ 吉本



あつちや切干下尾強右 荷今  
あつちやあまのま カクキ 質 重勝  
外 志く琴を悲しむ花のお 桃隈  
柳芽しよ 後の 交り 横儿

此一帖者於落揃舎書校合変

寺町二条

井つや  
重勝判

追加

於義仲寺六七日

惟然

花多にエウすれ 居るに冬もま  
葉乃紙此をねにエウす  
陽くに火幹のやあとうるまを  
明日かんでとまると信ふ心 拙高  
月新錦抱へら心 掬くろ 昌彦



かしらにつまきく様い印の書 遊及  
 草狩りまことそとしくと居久く 文州  
 彦虎乃觸にその心代 刺 純筆  
 角形を今にのやな 家中に 胡故  
 なかり細よ 毒乃 名 物 直畏  
上人  
 とやしきくひらりと梅の香きと 尼 智月  
 きとるひこ乃瘦きとなく 惟然  
 恵ん佛まそしかし 秋乃孫 正秀  
 翁よ尚よハ 鹿見 孝此月 卧る

新島方に陰の奥にぬる草蓋あけく 昌房  
 糸と情おしとくも 弟 游刀  
 とらりと花よ夕日の入るま 丈艸  
 清しの梅子心なふり 胡椒  
 蘇ぢよ隣つれ立けり乃 風 直喜人  
 芝居を鼓乃拍子おんけき 魚見  
 びつしきと糸とを想に書 裾を 掃芝  
 地えあひ先くとしり 香夜とま 徹房  
 唄うくにほかちるる 家 片平い 川支

廿四  
 廿四



あはれ乃髪ふとけく雲丈艸  
照月と海老名乃海よあはれ也乙列  
秋此小羊にさしる隈さく曲翠  
うれしうる階子の下乃さきり居  
砂疥の鞘を双云此入蘆葉  
お合の終を移せる道ま行北ま  
茶焼よえさるる乃弁の花  
立たしぬ捨しものとは此中ひ胡故  
さのつえりしをこ味縁まひく怪物

いざ乃あつた多き門徒さく  
なしきぬうらまはなくをる朴吹  
こつちうとあましく仕旦し  
心しあくる芝乃うけらふ昌房

この仙満座訃音と吟

藤原大垣

肩うちらし手らるるは泣きし門徒  
此海や胸不然切くささ乃雲 荊白

十巻

七二



冬は疎草をこぼしきぬりれを斜嵐  
 を牡丹梅の原系なけき弘文の  
 鳩消く園はあがり冬あがり如風  
 兼心しし木は龍さう落葉は赤  
 あら土乃墓もとくぬやあそいら胡風  
 草鞋のたなうーや野田の鳥書造  
 冬あがり 飯よりうーうーとさよ朱地  
 冬あけく張る原や人々の遠里末  
 泣入く如減の遠みまきさうね野徑

冬は雲い何となきころとあところ  
 草の多れ枯さく甲斐なき園が支造  
 清る手に併えへよ墓乃を花竹官  
 本うしし子候りしをささけむけ外裾道  
 切石とびく位よりとねの音尼教清  
 十方をさし洞や枯る柳うけ柯山  
 月代とさうてしきー城のあ及肩  
 しぬそとやあやまう頭陀袋鳴枝



飛月十六日芭蕉翁三十九日

於三衣仲赤真行

皇土をく運乃市と持ッ氷うね 桃熟

あまのりあくる 冬乃葉の冬 智月

政とよ子生る 鶴れ結るまゝ 正秀

世白目より略々

皇都 諧仙堂 藏板

書林

井筒屋庄兵衛 板行

橘屋治兵衛

浦井徳右衛門



